

## 農業農村工学サマーセミナー2023 活動報告 Report on Summer Seminar in 2023 supported by JSIDRE

筏津春花\*  
(IKADATSU Haruka)

○浅野珠里\*\*  
(ASANO Juri)

岩瀬充季\*\*\*  
(IWASE Atsuki)

### 1. はじめに

サマーセミナーとは、農業農村工学会（以下、本学会）の大会講演会後に学生主催で開催しているセミナーである。農業農村工学を学ぶ学生や若手研究者を対象とし、農業農村工学を多面的な角度からとらえ、議論や情報交換することを目的としている。1996年の第1回開催<sup>1)</sup>から始まり2023年度は24回目の開催となる。大会講演会が現地参加とオンライン参加のハイブリット化したことに伴い、コロナ禍でオンライン開催であったサマーセミナーも前回開催よりハイブリット開催とした。サマーセミナー2023は8月31日（木）から9月2日（土）の日程で愛媛大学樟味キャンパスにて開催した。セミナーの参加者は最大で28人であり、そのうち対面参加は24人（学生：19人、社会人：5人）、オンライン参加は4人（すべて学生）であった。本報ではサマーセミナー2023の運営・企画や、セミナー実施後に参加者から集めた意見・感想を紹介する。

### 2. 開催形態

サマーセミナー2022の事後アンケートで今後のセミナー開催形態について調査したところ、対面開催とハイブリッド開催の希望者がほぼ同数であった<sup>2)</sup>。そこで実行委員で議論し、遠方からの参加や一部のみの参加、また学会発表のない学部生等の参加を期待しサマーセミナー2023はハイブリッド開催とした。実際にオンラインで参加した4名は、遠方かつ学会に参加していない学生であった。なお、ハイブリッド開催で障壁となっていた現地参加者とオンライン参加者の交流については、実行委員から声掛けを頻繁に行い、オンライン参加者を討論に積極的に巻き込むように心がけた。

### 3. 企画・運営

サマーセミナー2023は本学会大会講演会

が愛媛県松山市で開催されたということから、降水量の少ない四国における農業について知ることを目的とし、「いいとこ知ってこ！『愛媛のNN』～四国特有の農業農村工学を学ぶ～」をメインテーマとした。そして、これまでの参加者の意見や最近の話題も取り入れ2つの学習テーマを掲げた。1) AIと一緒にディスカッション、2) Look! 古地図, Walk! 松山である。テーマ1)はさらに2つのトピックを設定し、Chat GPT (Open AI, Inc.)を用いてディスカッションを進めた。テーマ2)は現地参加者のみの街歩き企画で、松山市の古地図を参考に市内を実際に歩き、土地利用の変移を調査した。企画内容を表1に示す。

広報活動は、学会誌「水土の知」の会告ページやサマーセミナー公式ホームページ、および農業農村工学会公式LINEを活用した。また、実行委員を中心に本学会所属の教員や学生に対して広く参加者を募集した。

### 4. 当日の活動内容

セミナー2日目に取り組んだ、学習テーマ1)と2)の様子を図1に示す。オンライン参加者はZoom (Zoom Video Communications Inc.)を用いてセミナーに参加した。学習テーマ1)では、ブレイクアウト機能を用いて現地・オンライン参加者が混合でグループワークをした。テーマ1)のトピックAは「四国の農業農村の特色を話し合い、他県との違いを調べる」をテーマに、四国の農業の特色を調べ、参加者の出身地の農業との比較を行った。トピックBは「耕作放棄地

表1 サマーセミナー2023の企画内容一覧

メインテーマ：いいとこ知ってこ！『愛媛のNN』 ～四国特有の農業農村工学を学ぶ～
テーマ1) AIと一緒にディスカッション トピックA：四国の農業農村の特色を話し合い、他県との違いを調べる トピックB：耕作放棄地がどのように使われているかを調べ、新しい使い方を考える
テーマ2) Look! 古地図, Walk! 松山

\*鳥取大学大学院連合農学研究科 The United Graduate School of Agricultural Sciences, Tottori University

\*\*岐阜大学大学院自然科学技術研究科 Graduate School of Natural Science and Technology, Gifu University

(現 東京大学大学院農学生命科学研究科 Graduate School of Agriculture and Life Sciences, The University of Tokyo)

\*\*\*東京大学大学院農学生命科学研究科 Graduate School of Agriculture and Life Sciences, The University of Tokyo

(現 鹿島建設株式会社 KAJIMA CORPORATION)

キーワード：サマーセミナー、若手交流、ハイブリッド開催

がどのように使われているかを調べ、新しい使い方を考える」というテーマで近年問題となっている耕作放棄地の活用について話し合った。これらのディスカッションは Chat GPT を用いた。Chat GPT は活用方法によってはディスカッションの壁打ち相手として活用でき、適切なプロンプトを使用することで質の高いディスカッションが可能になる。そこで生成系 AI の活用を目的として、使いこなし方を考えた。各グループはより詳細な話題を Chat GPT に提案させ話し合いを進めていた。プロンプトによっては期待した回答が得られない、間違った情報が提供されるといった Chat GPT の課題についても学べた。テーマ 2) の街歩き企画は、時系列地形閲覧ソフト「今昔マップ<sup>3)</sup>」を用いた。グループごとに目的地を設定し、目的地までの道中で過去と現在の土地利用などの地理情報の相違を見た。

## 5. 参加者アンケート

セミナー後に参加者にアンケートを取った。参加者 28 人のうち、実行委員を含む 23 人から回答が得られた。ここでは、参加のきっかけ、満足度、来年の開催形態に関する質問の回答を示す。セミナーを知ったきっかけに関する設問では、回答者の半数以上が「研究室の学生や同僚などの紹介」、約 35%が「所属大学の先生の紹介」と回答した。これは実行委員を中心に参加者を募ったことが要因と考えられる。過去の参加者から誘われるとセミナーの様子も詳し



図1 サマーセミナー2日目の様子  
(上：ディスカッション，下：街歩き)

く伝わるので、過去参加者の積極的な広報活動の重要性が示された。セミナー参加のきっかけに関する質問では、約7割近くが知り合いを増やしたいからと回答した。また、満足度を問うと回答者のほぼ全員が、参加者との議論を楽しめたと回答し、87%が知り合いを作ることができたと回答した。農業農村工学分野はマイナーな学術分野であり、同じ専門分野の学生が集まることはめったになく、そのため研究について議論する機会が少ない<sup>4)</sup>。このような理由から、全国の農業農村工学を学ぶ学生が集まる機会に知り合いを作りたいと考える参加者が多いと考えられる。来年の参加形態に関する質問では、回答者の約6割が対面開催を希望した。その理由(自由記述)には、オンラインでは交流の範囲が限られてしまうという意見があった。一方で回答者の約3割はハイブリッド開催を希望しており、学会に参加していない学生や遠方の学生も参加できる点が理由として挙げられていた。なお、今年度のセミナーの改善点(自由記述)では、オンライン参加者とうまくやり取りができなかった、現地参加者の輪に入れなかったという意見があり、両形態参加者の壁がまだあるということが明らかになった。今後ハイブリッド開催する際には、オンライン参加者に対してさらなる多面的な配慮を検討する必要がある。

## 6. おわりに

今年度のサマーセミナーも参加者、関係者の皆様のおかげで無事に終えることができた。研究室、大学の垣根を超えた学生間の交流は普段できるものではない、非常に有意義で貴重な機会である。今後もこのような若手の人的ネットワーク形成の場を提供できるよう引き続き精進していきたい。

謝辞：農業農村工学会および当学会所属の全国の大学の先生方および参加者の皆様にはサマーセミナー2023の開催にあたり多大なるご協力を頂きました。

参考文献：1) 中桐(2015), 2015年度農業農村工学会大会講演会要旨集, pp.54-55; 2) 筏津(2023), 2023年度農業農村工学会大会講演会要旨集, pp.818-819; 3) 今昔マップ <https://ktgis.net/kjmapw/kjmapw.html> (2024年3月5日閲覧), 4) 中桐(2020), 2020年度農業農村工学会大会講演会要旨集, pp.793-794.